

として働く松本清張と出会い、交流を深めていきます。清張の作品には節子をモデルにしたと思われる作品もあります。また、「レ・ミゼラブル」を日本語訳したフランス文学者・豊島与志雄、芥川賞作家の火野葦平らとも交流を持っており、特に豊島との関わりは深く、一時期は内弟子だったこともありました。

教師の傍ら女性問題に尽力 ― 戦中戦後の福岡で ―

昭和17年(1942年)9月、福岡市の福岡女学校(現福岡女学院中学校・高等学校)に国語教師として赴任した節子は、福岡市でさまざまな活動に関わりを持つようになります。

昭和20年(1945年)10月、朝日新聞西部本社企画部・婦人部嘱託として、九州タイムズで女性労働関係の執筆活動を行いました。翌年3月には朝日新聞社主催の婦人政治推進講演会の司会に抜てきされ、続く婦人政治推進西部大会では福岡県の婦人代表

として出席。5月には朝日新聞婦人政治推進委員となり、朝日婦人文化創立会長にも就任し、女性の政治参加運動へ活動を広げていきました。

この活動と同時に、福岡市内に事務局があった「自由人協会」へ入会し、協会の常任理事、発行誌の編集委員となりました。

そして、昭和22年(1947年)には福岡県婦人団体協議会の発足に尽力するとともに、衆議院議員 福田昌子ふくだまさこと婦人児童問題研究所を設立します。7月には筑

教師をしながら

女性問題にも尽力

紫海会(現福岡女子大学の同窓会)の初代会長に就任し、同校の4年制大学昇格運動に尽力。同年11月に

は、新しい文化を創造することを目的に東京で立ち上げられた文化芸術団体「火の会」の九州講演開催にも尽力しま



福岡女学校時代の職員集合写真(昭和18年)
※中列の左から4番目の眼鏡をかけた女性が節子(写真:福岡女学院所蔵)

力のない者のために開けた パンドラの箱

― 労働省官僚時代 ―

した。

昭和23年(1948年)5月、女性・

年少者保護と福祉のため設立された労働省婦人少年局主催の第一回講習会が東京で開催されました。全国の婦人少年室関係職員を対象とした講習会で、節子は福岡女学校を退職し、九州大学の高橋正雄教授の推薦で参加しまし

■ 昭和6年(1931年)

8月 「女人芸術」8月号で「支那との境」を発表

■ 昭和7年(1932年)

9月 大阪で危篤状態となるが奇跡的に回復

■ 昭和8年(1933年)

4月 福岡へ戻り、高崎印刷所で勤務

■ 昭和10年(1935年)

?月 機械工学専門エンジニアの山下利助と結婚

■ 昭和14年(1939年)

6月 「婦人公論」6月号で「山峡」が入選

■ 昭和17年(1942年)

9月 福岡女学校で教壇に立つ

■ 昭和20年(1945年)

10月 朝日新聞西部本社企画部・婦人部嘱託となる(九州タイムズで女性労働関係を執筆)

■ 昭和21年(1946年)

5月 朝日新聞・婦人政治推進委員となり、朝日婦人文化創立会長に就任

10月 自由人協会常任理事、雑誌「自由人」編集委員に就任